



ヴァルガス(ブラジル)大統領に  
謁見する使節団一行  
(前列右から2人目が平生、その隣が大統領)



ブラジル政府より平生に授与された  
コメンダトル勲章

平生が尽力したブラジルとの交流については  
外務省のホームページでも言及されています

1924年、訪問先のブラジルで日本人植民地の問題点を目にした平生三郎は、移民収容所の設立を思いついた。「余生と余財は社会国家奉仕のため」と考えていた平生は、移民が定住するには日本の資本家がブラジルの土地を購入し開拓することを急務とし、1931年に海外移住組合連合会会頭に就任。しかしブラジルでは反日運動が高まり、1934年には50年間の移民総数の2%に制限する移民二分制限法が議会通过する事態を迎えた。これに対して政府は、ブラジルに綿花の生産を奨励しそれを輸入する通商貿易で解決を図り、その交渉役として、平生を団長とした民間経済使節団派遣を計画した。当時川崎造船所社長を務め、さらに旧制甲南高等学校理事長兼校長および甲南病院理事長であった平生は当初団長を辞退したものの、「其使命を果し得る人は余の外に見当たらざれば…」という懇請により承諾したのであった。

民間経済使節団は1935年4月にブラジルへと出発。あくまで民間使節としての訪伯であったが、ブラジル政府は国賓として彼らを扱い、大歓迎の中リオデジャネイロに入港した。滞在中は綿作を奨励しブラジル綿の有望性を改めて感じ、さらには日伯通商協会の設立も合意された。最後の日伯会談では、外相から団長である平生にコメンダトル勲章が授章され、使節団の活動は成功を収めた。効果はさっそく表れ、帰国途中の1935年10月23日、ブラジル政府が移民二分制限条項の解釈並びに適用を緩和することに方針を決定したとの知らせが船上にもたらされた。岡田啓介総理大臣から勅撰貴族院議員奏請の連絡を受けたのは、帰国してから約1か月後の12月3日。5日には天皇陛下に「日伯貿易二就テ」と題するご進講を約90分にわたり申しあげた。そのひとときは平生にとって、身に余る光栄であった。

[https://www.mofa.go.jp/mofaj/ms/da/page25\\_000155.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/ms/da/page25_000155.html)

民間経済使節団への参加は  
ブラジル訪問から始まった

国賓扱いで歓迎を受け  
日伯通商協会設立も実現

# 平生三郎と 訪伯経済使節団

百世不磨



創立者平生三郎の教えを礎に積み重ねる「甲南教育」を  
永遠に消えることなく、存在し続けるさまを表す  
「百世不磨」という標題にたとえ紹介いたします。